

令和5年3月定例会一般質問

通告5

質問 認知症用のヘルプマーク製作について

答弁 ヘルプカードの利用普及促進に努めてまいります

12番 佐野 弥奈美 議員

【質問：佐野 弥奈美 議員】

12番、佐野弥奈美です。認知症用ヘルプマーク製作について質問いたします。

現在ある全国共通のヘルプマークは、義足、人工関節、内部障害、精神障害などにより援助や配慮を必要としている人を表わすマークです。当然、認知症の方も利用できるのですが、長い人生の中で培った経験やプライドなどがあり、自分がそうになってきていることを認めたくない方が多い中で、困りながらもヘルプマークをつけることを敬遠することがあります。しかも、赤地に白十字とハートがついているため、自分は病気や障害でないと、なおさら敬遠されてしまいます。

中標津町には要介護1、2の方が1月末で360人ほどいらっしゃいます。この数字は介護認定を受けている方の数字で、実際はまだいらっしゃると思います。

一昔前より認知症への関心、理解度は増えていますが、介護関係の施設にお願いするにしても費用はかかるわけで、子供にお金の迷惑をかけたくない、自分のお金はこれからの先の生活を考えると出したくないといった高齢者は多いと思います。そういった方へのヘルプマークはとても有効だと思うのですが、共通のヘルプマークは障害や助けが必要な人にとって赤くて目立つマークは有効だと思いますが、先ほども言ったとおり、認知症を認めたくない高齢者にとっては使いたい気持ちにはなれないようです。

現在、ヘルプマークには心臓、呼吸機能、腎臓、脾臓、小腸、直腸、免疫機能など、身体内部に障害のある方用のハートプラスマーク、妊産婦が交通機関等を利用する際に座席や喫煙などの配慮や緊急時対応のため身に付けるマタニティマーク、聴覚障害があることを示す耳マーク、ほかにもヒアリングやオストメイト、介助犬、手話マークなどいろいろな団体で作成しているヘルプマークがあります。行政でいけば、岐阜県では白杖、SOSシグナルといったマークを作成しております。

中標津町でも認知症の方がつけていても嫌がられない色合いやデザインの中標津町独



自のヘルプマークを作成していただけないでしょうか。目立つように赤でも良いのですが、その場合はデザインを変えるなどの方法で作るのもありかと思います。

認知症の方の中には、出かけているうちに帰宅方法がわからなくなっても、忘れたことが恥ずかしかったり、パニックになってさらにわからなくなったりして、人に聞くことができなくなっている人もいます。そんな時にこのマークを見た方が声をかけてくれるだけで戻れることもあると思います。

認知が進むと自身の格好も気にならなくなってきたり、歩きながらの独り言や周りを見ることも少なくなったり下を向いて歩いている。そういった人に声をかけづらいという雰囲気になっている方もいます。でも、そんな方たちも認知症ヘルプマークがあることにより周囲の方々が声をかけやすくなると思います。町長の考えをお聞かせください。

【答弁：町長】

佐野議員御質問の認知症用のヘルプマーク製作について御答弁申し上げます。

我が国の65歳以上の高齢者の7人に1人が認知症と見込まれており、本町においては、10人に1人が何らかの認知症を有すると見込まれております。

認知症の方が毎日同じ銀行に行ってしまうたり、目的や理由があつて外出したものの行き先や自宅の場所がわからなくなり行方不明になる事例も発生するなど、地域包括支援センターや関係機関での対応に苦慮する場合があります。

国が令和元年に策定した認知症施策推進大綱では、ヘルプカードを自治体に対し周知し利用を促進するとされておりまして、現在のところ北海道として認知症の人用のヘルプカードは作成されておりませんが、厚生労働省の令和3年度老人保健健康増進等事業において、認知症の人の希望を叶えるヘルプカードのあり方について調査研究が実施され、ヘルプカードのひな型が作成されているところであります。

このヘルプカードには、御本人が認知症に伴う不安や不自由を解消するための必要な内容を具体的に書ける余白があり、必要な時だけ必要な支援ができるように配慮されています。議員御指摘のとおり、ヘルプカードの活用は、認知症の御本人が外出を続けたい、買い物続けたい、銀行に行つて用事を済ませたいなど、続けたい暮らしを叶えるために、また、御家族が御本人を安心して送り出せるために有効なものと考えております。

御本人がヘルプカードを活用して社会参加をすることに関して、商店、金融機関、警察、消防等の理解・協力が必要となりますが、今後、厚生労働省作成のヘルプカードを活用して試行に取り組み、御本人や御家族、ケアマネジャー、介護保険事業者協議会など多様な関係者の御意見を伺いながら、認知症の方がつけていても違和感のないものとなるよう、

本町にあったヘルプカードの作成、利用促進、普及策の検討を進めてまいりたいと考えておりますので、御理解と御協力をお願い申し上げます。

【質問：佐野 弥奈美 議員】

はい。再質問させていただきます。

ヘルプマークもカードも同じような物ではありますが、カードだと財布の中に入れたり、ネームカードの中に入れて首から下げるといったような形で外から見えないということは余り意味がないと思います。ですので、今回はあえてヘルプマークとさせていただきます。

認知症の方が自ら財布の中のカードを出すとは思えませんし、首から下げるのは外す可能性もあります。御本人たちは認知症ではなく、高齢のために物忘れがひどくなっているだけだと思っているので、カードは使うことはないと思います。

しかも、国が進めているそのヘルプカードというのは、確かに協力をお願いしますというようなカードの中にいろんな今銀行で困っているのを手伝ってくださいというのがあるんですが、その中には私は認知症ですっていうような事例が書いてあったりするんです。ただ、本人は自分は認知症だと思っていないので、その認知症ですと書かれたものを出すかと言ったら出さないし、使うかと思ったら使うこともないと思います。

しかも、自分がお願いしたいものを書くようになっていますが書いたものを忘れる、財布の中に入れたものを忘れるっていうのが認知症です。本人は認めたくない、これからどうしたらいいのか不安、知られたくないと思っているのに、そういったことを書くのは抵抗があると思います。

困っている人に声をかけて聞いてあげるっていうのが1番わかりやすい。聞いてもらうのが1番わかりやすいのです。例えばその方に声をかけられなくても、マークがついていると目にした時に気にしていただけたと思います。

また、本当であればGPSなどをそれにつけた場合、行方不明になったときの目撃情報、位置情報なども得られやすくなると思います。既存のヘルプマークのように、かばんやベルトなどにつけられるようにすると外からも見やすくなります。

先ほどの質問でも言いましたが、認知症の方が嫌がらずにつけていただけるマーク、カード。一目で助けが必要な人だとわかる工夫が必要だと思います。カードでも良いのですが、それを見やすく身に付ける方法を併せて考えていただきたいと思いますがいかがでしょうか。

【答弁：町長】

再質問にお答え申し上げます。

佐野議員、再三おっしゃるようになりますね、認知症の方が私が認知症ですっていうのをカードにしたりホルダーにして持ち歩くっていうそのもの自体が多分無理だろうというのは、それはもうそのとおりだと思いますので、そういったことをあえて、わからせないためには周囲の温かい理解も当然必要になると思います。

そういうことも含めて理解しながらですね、身につけるようなタイプのものをですね、しっかりと考えて普及推進に努力したいと思います。以上です。